

黒羽芭蕉の館だより⑨

黒羽の芭蕉句碑 (2)

広報おたわら9月1日号の本欄のあと、10月1日号では芭蕉句碑の拓本に焦点をあてた当館企画展について紹介しましたが、今回は黒羽地区に立つ10基の句碑(芭蕉9基、曾良1基)の紹介を続けます。9月1日号では当館付近の4基の内の3基について紹介しましたので、今回は4基目からとなります。



「山も庭もつぎき入るや夏坐敷」(芭蕉公園)

すなわち「芭蕉公園」(浄法寺邸跡)に立つ句碑へ山も庭もつぎき入るや夏坐敷(碑高91cm)。俳人の加藤楸邨筆で、昭和34年(1959)5月に黒羽町観光協会が建立したものです。曾良の「俳諧書留」には「秋鴉主人の佳景に対す」との前書があり、句意は、この浄法寺家の夏坐敷から眺めると、涼風が新緑の山や庭前の草木

を吹き動かして座敷に流れ込んでくるようだ、となるでしょう。

続いて5基目は、那珂川を渡った黒羽向町の常念寺(浄土宗)の境内に立つ(野を横に馬牽むけよほとゝぎす)の句碑です(碑高140cm)。時鳥が鳴いたので、その声のする方へ、北上する那須野の進行方向から横に馬を引き向けてくれ、の意です。この句碑については、江戸時代、浄法寺桃雪による建立との伝承があり、句碑の筆跡については、芭蕉の真蹟の可能性も指摘されます。また、市内の句碑の中では、この句碑だけが市指定有形文化財となっています。

6つ目に紹介するのは、黒羽向町の明王寺(真言宗)の境内に立つ(今日も又朝日を拝む石の上)の句碑です(碑高124cm)。当館初代館長でありました蓮実彊氏の筆になり、昭和63年(1988)、明王寺が建立したものです。この句は、黒羽滞在中の芭蕉が余瀨の鹿子畑翠桃邸で催した歌仙の名残の裏の初句(全36句中の第31句)です。この句の前に、秋風の中で芝を刈る流人の姿を詠んだ句があるので、芭蕉はそれに触発されて、「石の上に立って今日も朝日を拝む行者の姿」を詠んだのでしょう。発句ではないため、季語は含まれていないのです。

問い合わせ

黒羽芭蕉の館 ☎(54)4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 ⑳

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

ふれあいの丘の芝生広場の最南端に、ひときわ高さのある彫刻が立っています。によきと直立した円錐状の石の柱からは、風になびいた羽衣を思わせるような、四重、五重のひだが顔を出しています。柱のてっぺんは平らで、見事に磨き上げられた水滴状の塊がちよこんと載せられています。



作者は風や水にこだわりを持って制作しているといいます。また、制作のために訪れたふれあいの丘で

星のしずく

おかむら きんじ
岡村 謹史
1999年

は、無限に広がる夜空の美しさに感動したともいいます。その作者によって、気負うことなく、素直に素材の石に向き合っ生み出された作品です。「星のしずく」、何ともロマンチックなタイトルがつけられていますが、作者のこだわる風や水の存在を感じさせてくれる作品です。



岡村 謹史氏

作者は、1944年静岡県生まれの岡村謹史氏。1972年に彫刻家・圓鍔勝三(えんつばかつぞう、日展の顧問など歴任、文化勲章受章)氏に師事。二科展において特選、会友賞、特別記念賞、ローマ賞、会員賞といった数々の受賞歴があります。1998年にはハンガリーの国際彫刻トリエンナーレ(3年に一度開かれる国際美術展覧会)やシンポジウムにも参加。二科会会員。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 ☎(23)8718